てんとう虫っぽいサンバ

栖坂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

てんとう虫っぽいサンバ

【Nコード】

N0360M

【作者名】

栖坂月

【あらすじ】

てんとう虫っぽいサンバって知ってる？ そんなことを尋ねてくる彼女に、俺は首を横に振った。映画らしいが見た記憶はない。とりあえず詳細を聞いてみることにした。

(前書き)

気楽なコメディです。
肩の力を抜いてお楽しみ下さい。

「てんとう虫っぽいサンバって知ってる？」

「何だ、それ？」

「何だったかな、映画だと思っただけど……」

歌ですらないらしい。

彼女は上手く思い出せないのか、腕を組んで天井を見上げたままうーと唸っている。鼻の穴が少し広がっていた。

「とりあえず、憶えている所だけでも話してみ？」

俺は、このままでは話が進まないと察し、促してみる。

「そうだね。もしかしたらどこかで一緒に見ていたかもしれないんだし」

そんなタイトルの映画を見た記憶はないが、まずは話を聞いてみることにした。

「えっとねー、六本くらい脚のある男の人がね」

「ちよつと待て」

慌てて止める。

「六本の脚？ 腕と脚を合わせて六本でも二本余るのに、六本の脚？」

「だってしょーがないじゃん。思い出せる映像の男の人は、確かに六本脚なんだもん」

この時点で、異様な映画なのは確定的である。

「……まあいいや。続きは？」

「その六本脚の男が、唇を突き出して女の人に迫るんだけど、女の人には逃げるのね」

そりゃそうだ。俺だって逃げる。

「でも強引に口を吸われて、キスとかしちゃうの」

「それはキスなのか？」

「わかんないけど、そうなんじゃないかな。んで、妊娠しちゃうの」

「何でっ!？」

「そんなの知らないよ。映画作った人に文句言ってよ」

まあ確かに、それもそうだ。彼女に文句を言うべき筋合いのことではない。というか、そんなトチ狂った映画を二人で見た憶えなんぞ、毛ほどもないんだけど。

「それでね、このままじゃ産めないよって嘆く二人のところへ」

まず産む気なのが凄い。

「赤い帽子を被って青いシャツを着て黄色いモンペを履いた産婆さんが現れるの」

「何か変なの来た! 何なんだよ、その鳩山と渡り合えそうなファッションセンス!」

「監督の趣味でしょ。あ、ちなみにその産婆さん、昔はコギャルとかやってたらしくて、体中に染みがあるのね。それがとんとう虫の模様みたいに見えるから、とんとう虫っぽい産婆って言われてるの」
「どうしてそれをタイトルにしちゃったのっ?」

主演は産婆か、産婆なのか!

「だから監督に言っつてよ。で、メインキャストが揃ったところで、森の動物達や虫達が出てきて、一緒にダンスを踊るのね」

「ずいぶん強引なミュージカル展開だな……」

「で、踊り終わって一汗かいてから、出産なんだけど」

「あー、準備運動か何かだったんだ」

垢抜けた産婆もいたものだ。いや、破天荒と言うべきか。

「いざ妊婦さんの前に立った産婆さんは、暗く重い声で呟くように言うのね、『この子は産んではいかん。間違いなく忌み子だ』って」
雰囲気変わりすぎだろ。

「女の人と妖怪六本脚は、それでも産みたいと懇願するんだけど、産婆さんは許してくれないの。絶望した二人は、それでも諦めたくないとして新しい産婆さんを探して森を脱出することにしたんだけど、とんとう虫っぽい産婆さんは忌み子が世に出ることを恐れて、追っ手をけしかけるのね」

えっと、もう何だろ、この話。

「結果、二人は毒々しい花を咲かせる鳶で編んだ籠のような牢獄に閉じ込められて、その隙間から高速で入ってくる小鳥達の攻撃に晒されて、終には亡くなってしまふの……」

ミュージカルが終わった瞬間から、とんでもない鬱展開である。

ただいずれにしても、ここまで筋を聞いたというのに何一つ思い出せることはない。少なくとも俺は、この奇怪な映画を見てはいないようだ。

「とりあえず、俺は見たことない映画だな」

「そんなことないよつ。だって昨日」

言いかけて、彼女の表情が停止する。

それにしても昨日？

確かに昨日は、彼女と一時も離れることがなかった。まあトイレや風呂は別だったけど。少なくとも、映画一本を一人で見られるような時間はなかったと思う。

「……ごめん。昨日見た夢だったかも」

「夢なのかよっ！」

そりゃ知らんワケだ。

というか、監督お前じゃねーか！

「んー、そういえば何でこんな話になったんだっけ？」

「お前がそれを言うのか？」

まあいい。今更だ。

「確か、結婚式の定番ソングとかって話だったと思うぞ」

「そうだったけ。脱線しちゃったねー」

「させるのはいつもお前だけだな」

「あ、酷ーい。まあキツカケはそうかもしれないけど、ノリ君が乗ってくるからでしょ」

乗らないと怒るからでしょ。

それにしても、拳式一週間前にコレとは、少し呆れる。緊張感がないというか、自覚が足りないというか、この先やっていけるのだ

ろうかと不安も感じる。

まあ、こういうところも好きなんだけどさ。

「そんなことよりホラ、今日の予定は？」

少し焼かれすぎた目玉焼きを突付きながら、二人で迎える朝食を改めて堪能する。幸せを感じる瞬間は無数にあるが、この何気ない時間を好きだと言ったら、彼女は何と答えるだろうか。

「んーとねえ……」

明るい笑顔と共にスケジュールを思い出している彼女は、ハツキリ言って間が抜けて見える。もちろん、見えるだけで本当に抜けているのではないが。

ただ、どんな形であれ、この笑顔が曇らぬよう在りたい。

焼けたというよりは焦げたトーストを齧りながら、そう思った。

(後書き)

夢オチって、一度やりたかったんですけどよ。
いや、それだけなんですけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0360m/>

てんとう虫っばいサンバ

2010年10月8日14時40分発行